前回までのあらすじ

流遠(るとお)やみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があって、友達がいて、好きな男の子がいる。
しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。
少女の名はツバキ・タカチホ。
彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。
ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅(せんめつ)であり、彼女はそのための存在――〈機獣(きじゅう)少女〉だった。

〈カタストロ〉対策のために訪れていた夜の公園に現れたクラウ。彼女との激戦の最中(さなか)、〈カグツチ〉に身体のコントロールを預けて戦っていたやみひめは、その圧倒的な力の前に一度は倒れてしまう。だが、その後の異変により復活し、今度はやみひめがクラウを追い詰めた。
それまで戦いを見守っていたツバキだったが、このままではクラウを殺してしまうと判断し、豹変したやみひめ達を身をもって止めようとした。だが、彼女はツバキを認識しておらず、クラウ諸共(もろとも)、トドメを刺そうとした。
その時、反撃の機会を窺(うかが)っていたクラウの攻撃から咄嗟(とっさ)にツバキを護ったのは、本来の意識を取り戻したやみひめだった。

登場人物

◆流遠（るとお）やみひめ

地元の小学校に通う、六年生のごく普通の少女。思慮分別が出来る聡明さと、他人を気遣える優しさを持つ。

◆ツバキ・タカチホ

惑星ゼヘナから来た〈機獣少女〉。小学五年生。地球では『高千穂（たかちほ）ツバキ』と名乗る。年齢不相応に発育の良い胸がコンプレックス。

◆カグツチ

ツバキのパートナー。〈機獣少女〉の武器であるＭＢデバイス。時代がかった女性の口調で話す。

◆橘（たちばな）アサト

高校三年生の少年。今年の夏、やみひめを痴漢から助けた事をきっかけに知り合う。やみひめの片想いの相手。

◆クラウ・Ｐ・ブラン

やみひめの親友にしてクラスメイトの少女。小学生離れした大人びた容姿の持ち主で、本人はそれをコンプレックスに感じている。

◆神譲（かみじょう）ハン

やみひめとクラウのクラス担任。大学の特別制度により、一年間の特別教育実習生として赴任中。クラウとは親戚。

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX

閑静な昼下がり。

その部屋は室内灯を点けずとも、窓の外から射し込む陽光によって、充分な明るさを保っていた。

学習机があり、本棚のラインナップや置かれた小物から察するに、恐らく部屋の主は女の子だろう。中学生になるかどうか――そのくらいの年齢に思える。整理整頓されていて、掃除も行き届いており、住人の几帳面な性格が窺える。

「ん……」

窓際に置かれたベッドで眠っていた少女が目を覚ました。

美しい少女だ。

長い黒髪は艶やかで、それらを受け止める白いシーツと強烈なコントラストを成している。薄っすらと開いた瞳は琥珀のような橙色で、やや吊り目がちだが寝起きな事もあり、攻撃的な印象はまるでない。

しかし、その少女は高校生くらいの容姿で、少なくとも小学生には見えない。それ以前に、普通の人間の頭部に、狼を思わせる耳は生えていないだろう。その毛並みは生々しさすらあり、ぴくぴくと動いていて、とても作り物とは思えない。

「……？」

上半身を起こし、少女は寝ぼけ眼で部屋を見渡す。まるで、見知らぬ場所で目覚めてしまったかのように。

少女は記憶を辿る――が、何も思い出せない。此処にいる経緯も、此処が何処なのかも、自分が誰なのかすら。

――にゃー。

ふいに、不思議な声が少女の耳朶を打った。

視線を下げると、声の主はすぐ近く――少女の下半身に掛かった毛布の上にいた。

猫だ。

茶色の日本猫で、警戒する素振りも見せずに横たわっており、黄色い瞳をじっと少女に向けている。少女は、しばし猫と見つめ合うと、靄がかっていた記憶が、少しずつ晴れていくのを感じた。

少女はその猫の名前を知っている。

「……ベアトリーチェ――？」

第十二話

『機獣少女と揺れる意志』

目覚めた場所は知らない部屋で、自分が誰か思い出せない。普通であれば不安になったり、慌てたりするのかもしれないが――ここまで状況が判らないと、むしろ冷静になってしまうらしい。

だがそれは、目の前に見知った存在がいるからかもしれない。

茶色の毛並みの日本猫。

彼女の名前はベアトリーチェ。

見知った存在と表現したが、実物と対面したのは初めてだ。

実物とは初対面……では、私はどこでベアトリーチェを知ったのだろう？

――にゃー。

ベアトリーチェが、私の心の声に答えるように鳴いた。

そうだ、アサトが携帯電話で撮った画像で見たのだ。日曜日にツバキと買い物に行き、それに付き合ってもらって――

次々と記憶が蘇える。

私の名前は流遠（るとお）やみひめ。小学六年生の女の子。

アサトは今年の夏に、痴漢から私を助けてくれた高校生三年生の男の子。それをきっかけに、私は彼に恋をした。

ツバキは惑星ゼヘナという、地球とは別の星から来た女の子。一つ年下の小学五年生で、〈機獣少女〉と呼ばれる存在。一緒に地球に跳ばされた敵性体――〈カタストロ〉を殲滅するのが仕事で、私はそれを手伝っている。

〈カタストロ〉対策をしながら、戦う訓練もして、水曜日の夜に公園で――

「っ……！」

頭に軽い痛みが走った。思い出す事を拒否するみたいに。

――うみゃ！

短い鳴き声と共に、頬（ほお）にぷにっとした感触。それはベアトリーチェの前足――肉球の感触だった。

「ベアトリーチェ……？」

じっと私を見つめるベアトリーチェの黄色い瞳を見ていると、不思議と心が落ち着く。

無理に思い出さなくていい――そう言ってくれてる気がした。

「……ありがとう、ベアトリーチェ」

私がベアトリーチェを両手で抱き上げると、されるがままに抱きしめさせてくれた。茶色の毛並みはふさふさで、ずっとこうしていたくなる。

そうして私がベアトリーチェと戯（たわむ）れていると――

――こんこん。

と、控えめなノックの音が聞こえた。

「――やみひめさん、ツバキです。起きていますか？」

此処（ここ）がどこか判らないから緊張したけど、ノックの主はよく知る相手だった。

私の返事がないから寝ていると思ったんだろう。ドアを開いたツバキは、上半身を起こした私の顔を見るなりギョッとした表情になって、でもすぐに安心した顔をして、次の瞬間には泣きそうになっていた。

ツバキはいつも澄まし顔で落ち着いてるから、その百面相ぶりは新鮮だった。

「やみひめさん……！」

抑えきれないといった様子でツバキが私の元に駆け寄ると、少しだけ逡巡して、でも私の胸に飛び込んできた。ベアトリーチェが慌てる事なく退避すると、私はそれを受け入れて、ツバキをぎゅっと抱きしめる。

そこで違和感を覚えた。

ツバキは私より一つだけ年下だけど、身長は同じくらい。だけど、私が抱きしめているツバキの身体（からだ）は、なんだか小さく感じた。

「ツバキ……縮んだ？」

この雰囲気で言う事じゃないと思ったけど、そもそも、ツバキがどうして様子がおかしいのかも判らないし、此処が何処（どこ）なのか、どうして此処にいるのかも判らない。判らない事だらけだから、疑問は一つずつ解消したい。

「……やみひめさんが大きくなってるんですよ」

少し間を置いて私から離れると、ツバキは言いにくそうに答えた。

「どういう意味？」

「驚くなというのは無理かもしれませんが……これで、ご自分の姿を見てください」

ツバキが机の上にあったスタンドミラーを私に手渡す。鏡面に映っているのは当然、私だけど――

「どうして大きくなってるの？　それに、私の意思で話せてるし――あれ？〈カグツチ〉

は……？」

私の頭は『？』でいっぱいになっていた。鏡に映っていた私の姿は、〈機獣少女〉になって、更に〈カグツチ〉に身体（からだ）のコントロールを預けた時の、高校生くらいの私だったから。そして、この姿の際は〈カグツチ〉がメインの人格になって、私は意識だけの存在になるはずなのに、今は私が思い通りに身体を動かせる。

何より――〈カグツチ〉の存在を感じない。

「やみひめさん、おかしな事を訊（き）くと思われるかもしれませんが……貴女（あなた）は間違いなく『流遠（るとお）やみひめ』ですか？」

「え……うん、そうだけど」

「年齢は？」

「十二歳」

「趣味は？」

「特撮ヒーローもの」

「好きな男性はいますか？」

「……橘（たちばな）アサト」

ツバキが真剣な顔をしてるから答えたけど、面と向かってアサトの名前を出すのは……ちょっと照れる。

「よかった。普段のやみひめさんですね」

ツバキは真剣だった表情を崩して、安心したように言った。

「どういう事？」

「すみません。その質問に答える前に、もう一つ私の質問に答えてください」

ツバキが申し訳なさそうな表情をしつつ、また真剣な顔で言った。

「うん、いいけど……」

「昨夜の事は、どこまで覚えていますか？」

「えっと、水曜日だよね？〈カタストロ〉対策のために公園に行って、訓練をして、それから……」

それから、どうしたんだっけ？　確か、〈カタストロ〉は現れなかったから帰り支度をして――

「そうだ……くらうは！？　くらうと戦闘になって、〈カグツチ〉に身体を預けて、それからどうなったの！？」

思い出した。どうして忘れていたのか、信じられない。公園に現れたのは友達のくらうで、一瞬で黒いドレスと獣の爪みたいな武器を装備して、私に襲いかかってきたんだ。

途中までは覚えてる。一度は私達が優勢になって。でも、くらうの背中に機械みたいな羽根が生えて。それから――

「ん……っ」

記憶を辿っていくと、ふいに両肩が疼いた。

そうだ。クラウの爪から近接戦闘用光学兵器が出て、それに両肩を串刺しにされた。

覚えてるのはそこまでだった。

「そうですか。そこまでは覚えているんですね……」

私が覚えている事を話すと、ツバキは複雑な表情になった。なんとなくだけど、そこには安心の色も浮かんでる気がした。

「……私も自分が見た光景が信じられません。ですが、隠しても問題の解決になりません。なので、私が見た事をありのままにお話します」

そう前置きして、ツバキは重い口を開いた。

●　●　●

「――以上が、私の見たすべてです」

ツバキはそう言って、言葉を切った。

ツバキの話を要約するとこうだ。私の記憶にない場面で、私でも〈カグツチ〉でもない人格が現れて、くらうを一方的に追い詰めた。トドメを刺すのを止めようとしたツバキごと、くらうを殺そうとしたけど、反撃に出たくらうからツバキを護って怪我をして、そのまま気を失った。くらうはそのまま逃走。

「……」

ツバキの言う事を疑うつもりはないけど、信じられないし、信じたくない。

私でも、〈カグツチ〉でもない、別の人格……私の中に知らない私がいる？

それが友達を――くらうとツバキを、殺そうとした？

肌が粟立つ。

薄気味悪いし、何より自分が怖くなる。

「……ツバキ」

「はい」

私が気持ちの整理をするのを待ってくれてたんだと思う。私が口を開くまで一言も発さなかったけど、ツバキはすぐに答えてくれた。

「それは昨日の夜の事なんだよね？」

「そうです。今日は木曜日で、やみひめさんは半日以上、眠っていた事になります」
壁に掛かったアナログ時計は止まっていたけど、今は午後一時を回ったくらいだとツバキが教えてくれた。それから、公園での戦闘の被害は結構な範囲に及んでいて、市内の学校はすべて休校で、生徒は自宅待機を命じられているらしい。とりあえず、学校を無断欠席していない事に、ちょっとだけ安心した。
「此処(ここ)って、何処(どこ)なの？　私の家じゃないし、見覚えもないけど」
まずは身の回りの疑問から解消していく他ない。問題は大きくなっているし、判らない事は相変わらず多いから。
「それは……」
ツバキが言葉を濁した。
そして、タイミングを見計らったみたいにノックの音が聞こえた。
「あ――はい！」
「俺だ。開けていいか？」
ツバキが返事をすると、ドアの向こうから聞こえたのは知っている男の人の声。
「はい、どうぞ」
ツバキが了承すると、ドアが向こう側から開いた。声で判っていたけど、どうしてその人が現れるのか判らなかったから、その人の姿を見ても驚かざるを得ない。
その人は――アサトだった。
そこで私は理解した。
ベアトリーチェがいる時点で気付くべきだった。
此処はアサトの家だ。
「へ？　へ？　なんで……？」
訳が判らない。
だが、判る事が一つある。それは、今の私の姿が、アサトの知る小学生の姿じゃない事。狼の耳と尻尾も問題だけど、一晩でこんな急成長するはずがない。ツバキはどう説明したのか。真実を話したのか。それとも、上手く誤魔化したのか。誤魔化したのだとすれば、迂闊(うかつ)な事は言えない。ひょっとしたら、私の親戚と説明したかもしれないから、私だと言う訳にもいかない。そもそも、信じてもらえないだろうし。
「気が付いたのか――やみ子」
「――ふぇ！？」
え？　アサトは私だって知ってるの……？
ツバキの方を見ると、真剣な表情で私にこくりと頷(うなづ)いた。

「すみません、やみひめさん。橘さんには、すべてお話しています」

ツバキが言うには、気を失った私を運ぶのが不可能で、この姿で家に連絡する訳にもいかなくて、それでアサトを頼ったそうだ。

「話はツバキから聞いてる。なんというか……大変だったらしいな」

ベッドの傍(そば)まで来ると、アサトは私に向かってそう言った。いつも通りの気怠(けだ)い表情と口調だけど、いつも通りな事に、むしろ私は安心した。見た目が変わっている事や、隠し事をしていた事で、嫌われてしまうんじゃないかと怖かったら。

「けど、俺も昨日は大変だったぞ。夜中に呼び出されて、お前を人目に付かないように背負って帰って、お前の親御さんに上手く言い訳して……なんだかんだで、ほとんど寝てない」

気怠い雰囲気なのはいつも通りだけど、少しだけ疲れてるように見えたのはそういう事らしい。でも、なんでツバキはアサトの連絡先を知ってたんだろう？　あたしの家の電話番号と一緒に教えたかな？　覚えてない。

「どうした？　どこか悪いのか？」

私が無言な事を不審に思ったのか、アサトが気遣ってくれたのに、私は首を横に振るしか出来ない。

「食事にするか？　簡単なものなら用意出(でき)来るぞ？」

アサトの言葉に、私はまた無言で首を横に振る。

「遠慮ならするなよ。それとも、俺の料理の腕を疑ってるのか？」

また首を振る。

「じゃあ、何かしてほしい事とかあるか？　あれば出来る限り――」

「アサト……！」

アサトの言葉を遮(さえぎ)って、私はアサトの胸に泣きじゃくる子供みたいに縋(すが)りついていた。いつもと同じだけど、いつもより優しくて、だけど、やっぱりいつも通りに接してくれるのが嬉しくて。我慢なんて出来なかった。

●
●
●

食事の用意をしてくる――そう言ってアサトは部屋を出ていった。それを見届けると――

――

「……」

ふいに視線を感じた。それも二つ。

「――ふぇ！？」

視線を辿ると、そこにはいたのはツバキと、その胸に抱えられたベアトリーチェだった。ツバキの表情はいつも通りの澄まし顔だけど、私を見る目が、ちょっとだけ生温かい気がする。それはベアトリーチェも同じで。

「ベアトリーチェ、私達、完全に空気でしたね」

ツバキの言葉にベアトリーチェが同意するように鳴く。

「いっそ光学迷彩か何かで姿を消した方がよさそうですね」

また同意するように鳴くベアトリーチェ。

「私達、要らない子ですね」

ベアトリーチェがまた――

「もう！　からかわないでよ！？」

たまらず私は悲鳴を上げる。アサトの胸に縋って泣きじゃくる姿を見られただけでも恥ずかしいのに、こんな風に遠回しにからかわれるのはきつい。いっそ、はっきりと冷やかされた方がマシだ。

「ふふ。すみません、ちょっと悪趣味でしたね」

ツバキがちょっとだけ申し訳なさそうに言った。それに同意するようにベアトリーチェが鳴く。ずっと思ってたけど、ベアトリーチェは私達の言葉を理解してるんじゃないかな……。

「だいぶ落ち着かれたようなので、少し今後の話をしておきましょう」

「え？」

「率直にお訊きします。やみひめさん……まだ、私に協力してくれますか？」

ツバキが表情を改めて私を見つめる。

「昨夜の事で、実戦がどういうものか身をもって判ったと思います。次も生きて帰れる保証なんてありません。それでも、まだ〈機獣少女〉を続けてくれますか？」

ツバキの言葉は落ち着いていて、強要するようなニュアンスは感じられない。私の意思に任せてくれてる。だから、私がここで辞めても、それを責めたりしないと思う。ツバキはずっと、私を『善意の協力者』だと言って、深入りする事を避けてくれたから。

「……正直に言うと、もう戦いたくない」

意識を失う前までの事は思い出したから、両肩を近接戦闘用光学兵器で串刺しにされた時の痛みも覚えてる。〈カグツチ〉に身体を預けている間も、感覚は共有していたから。

「あんな痛いの、もう嫌だよ――」

両肩の傷は痕跡も残さず治ってる。それでも、思い出すと傷跡が疼くような感覚がある。

「ごめんね。ツバキは私より年下なのに、こんな事をずっと続けてるのに、私は……怖いよ」

自分が情けない。私が手伝うって言い出したのに、今更こんな事を言うのは卑怯だと思う。でも――

「――それが普通ですよ」

ツバキの優しい声音が、私の自分に対する嫌悪感を払うように、ゆっくりと心に浸透していく。

「私とやみひめさんでは事情が違います。私の世界では〈機獣少女〉が〈カタストロ〉と戦う事が普通ですが、この国では違いますから」

そう言って私を見つめるツバキは表情も優しくて、心の底からそう思っているのが伝わってくる。

「ここまで戦ってくれたやみひめさんの勇気に、私は敬意を表します。少なくとも、今の私があるのは、やみひめさんのおかげです。住む場所をくれて、優しくしてくれて、色々な事を教えてもらいました。本当にありがとうございました」

「ツバキ……」

「だから、自分を責める事だけはしないでください」

いつもの澄まし顔に優しい表情を浮かべて、ツバキは言葉を切った。

そんなツバキに、私は何も言えなかった。謝罪や自虐的な言葉しか浮かんでこなくて、だけど、そんなものをツバキは望んでいないから。

●　●　●

「ごちそうさまでした。橘さんは料理もお上手なんですね」

「オムライスなんて、大した料理じゃないけどな。てか、『も』って何だ？」

「いえ、家のお掃除や洗濯もちゃんとされているようなので、家事全般の事を指しただけですよ。あ――そういえば、年下の女の子の扱いもお上手でしたね」

「……ツバキは本当に良い性格してるな」

あの後、すぐアサトに呼ばれて、リビングに移動して食事になった。アサトの作ったオムライスはたしかに美味しかったけど、ツバキが言った『年下の女の子の扱い』って何の事だろう？

だけど、私はそれを話題に上げる気分になれない。ツバキには自分を責めなくていいって言われたけど、そんなに簡単に割り切れない。

「どうした、やみ子？　口に合わなかったか？」

食事中も一言も会話に加わらなかった私に、アサトが声を掛けてくれた。いつも通りなんだけど、やっぱり私を気遣ってくれてるように感じる。それが嬉しい半面、申し訳なくも思う。私は自分で言いだした事を、途中で投げ出そうとしているから。

「ううん。すごく美味しかったよ。私もアサトが料理が出来るのが意外だったけど」

「一人暮らしだから、やらざるを得ないんだよ。嫌でも出来るようになる。湯水のように金があるなら別だけどな」

自慢するでもなく、かといって、謙遜する訳でもなく、アサトは答えた。一人暮らしなのは知ってたけど、それが家事を自分でするっていう事に繋がらなかったから、アサトが料理をするイメージが今までなかった。

「そういえば、アサトって妹がいるの？　あの部屋、女の子の部屋だよね？」

会話を途切れさせるのも悪い気がして、私は気になっていた事を訊(き)いた。私が寝ていた部屋の調度品は、私と同い年くらいの女の子っぽい気がしたから。少なくとも、客間や物置き部屋じゃないと思う。

「あ―……お前には言ってなかったな。妹の部屋だ」

やっぱり、妹がいるんだ。でも、『お前には』って言った？

ふと右の席に座ってるツバキに視線を向ける。いつも通りの澄まし顔だけど、どことなく緊張してるような感じがする。

「……何ですか？」

「ツバキは知ってたの？」

「……」

「知ってたんだ。ふ～ん。私は知らなかったのに。へ～」

ジトッとした視線をアサトにも向けると、ツバキと似たような雰囲気を感じた。

え……なに？　この彼氏の浮気現場に鉢(はち)合わせして、浮気相手が友達だったみたいな感じ。

「あの、実はですね……」

ツバキが観念したように事の真相――というかなんというか――を話してくれた。私が学校に行って、ツバキと別行動をしていた時、たまたまアサトに会って一緒にクレープを食べたらしい。妹がいる話も、その時に聞いたそうだ。

「ずるい！　私もアサトとクレープ食べたい！　それに、なんで秘密にしてたの！？」

「こうなると判ってたからだろ」

「アサトは黙ってて！」

「……」

私の剣幕に圧(お)されてアサトが黙る。

「あの、橘さんは悪くないんです。私がやみひめさんには黙っていてほしいと、お願いしたんです」

「う……」

ツバキが本当に申し訳なさそうに言うもんだから、私の方が逆に罪悪感を感じてしまう。まるで、私の方が浮気をされてるのに、完全に悪者は私みたいな状況。

「別にいいけど……」

私がそんな事で怒る小さい人間だと思われていたのがショックだった。実際、怒ったけど……。

「すみません、やみひめさん。やみひめさんが橘さんを好きだから、そんな橘さんとの秘密が出来たら嬉しいなっていう、ちっぽけな自己満足のつもりだったんです。私、浅ましいですね……本当にごめんなさい」

「ちょ、もういいよツバキ!? ツバキは悪くないよ！ こんな事で怒った私の方がちっぽけだよ！ だから、そんな顔しないで！ ね!?」

一気に立場が逆転した。もし今のツバキを見て、それでも責める人間がいたとしたら、それは人間じゃないと思う。そのくらいの罪悪感を覚える表情だった。

「でも……」

「いいから！ もう全然、気にしてないから！ 私こそ怒ってごめんなさい！」

私の必死さが伝わったのか、ようやく曇っていたツバキの表情が晴れた。

ツバキは怒らせても怖いけど、逆に悲しませても怖いんだな……。

「――さて、問題が解決したところで今後の事だが」

「アサトは許してないよ?」

「……一緒に許せよ」

「じゃあ、私とも一緒にクレープを食べに行くこと。それで許す」

「あー……判った判った」

――にゃ～。

そんなやり取りをしていると、ふいにベアトリーチェが鳴いた。それまで食卓とは離れたソファーに寝転がっていたのに、まるで自分も連れて行けと言っているみたいに私達を見ている。

やっぱり私達の会話を理解してるみたいだ。

「……ベアトリーチェは、まるで私達の会話を理解しているみたいですね」

ツバキも同じように感じていたみたい。

「ん？　まあ、察しの良い奴ではあるな。猫は不思議な生き物だから、そうだとしても俺は驚かない」

「ベアトリーチェって女の子なんでしょ？　察しが良いなら、急に女の子が二人も来て、嫉妬したりしないのかな？」

『この泥棒猫共！　ご主人様は渡さないにゃん！』――みたいな感じですか？」

私の発言にツバキが乗ってくれた。ツバキは真面目だけど、こういうノリは良い。バランスが良い子だと思う。けど、猫に『泥棒猫』って言われるのは面白い気がする。

「それはないな。むしろ、浮気なんて許容する気がする」

「確かに、『正妻の余裕』を見せそうですね」

アサトの意見に、ツバキが苦笑した。

バランスが良い子だけど、ツバキは実年齢と精神年齢のバランスは悪い気がする。他にもバランスが悪い部分はあるけど……。

ふと、自分のその部分を見下ろしてみる。身長や手足の長さの変化を特に意識しなかったから気にしてなかったけど、今の私は高校生くらいの身長で、体格も相応に変化している訳で……。

「どうかしたか、やみ子？」

「ふぇ！？　べ、別にどうもしないよ！？」

「？　そうか」

不審に思いながらも、アサトは追及しないでくれた。

意識しだすとアサトの視線が気になってしまう。なにせ今の私は、ツバキの身体的に規格外な部分――すなわち胸のサイズが大きくなっている。多分だけど、身長とのバランスで、そこまで大きい気がしないだけで、ツバキより大きいと思う。

そっか。ツバキが胸の大きさをコンプレックスに感じてるのは、年齢とのバランスもあるんだろうけど、他人からの視線が気になるからなんだ。

「……ねえ、ツバキ」

「はい？」

「今まで、ごめんね」

これまでのセクハラまがいの自分の行動を省（かえり）みて、私は深く謝罪した。身体的な特徴を指摘されたり、注目されたりするのは、悪意がなくても恥ずかしいんだって判ったから。

「あの、急にどうされたんですか……？」
ツバキは何を謝られてるのか判らず眉をひそめている。当然だけど。
「しかしあれだな。中身が変わってないから気にしてなかったが、こうして見ると、やっぱり違うな」
アサトが話題を変えるように私に言った。
「え？　違うって……」
「いや、着けた方がいいんじゃないかって。ないと気になるというか」
『着ける』って何だろう。アサトが何を指して言ってるのか考えてみる。今まで、胸の事を考えていたせいか、自然とそこに注意が行く。
もしかしてアサト、ブラを着けてないと思ってるのかな？　一応、着けてるんだけど、この大きさだからノーブラだと思われてる？　というか、アサトってば、私の胸を見てて、だから着けた方がいいって……え!?　そうなの!?

「――ポニーテールにしてないと、やみ子っぽくないだろ？」

「あ、アサトのえっち！」
私は思わず反射的に怒鳴って、両手で身体を抱くようにして胸元を隠した。
ポニーテールだなんて、アサトの……あれ？
「ポニーテール……？」
「や、やみひめさん？」
「なんで髪型の話で変態みたいに言われにゃならんのだ」
ツバキはきょとんとしてるし、アサトは訝（いぶか）しげな目で私を見てる。
「だって、『着けてない』って……」
「だから、リボン着けてないだろ？」
自分の後頭部に触れてみる――ない。
自分でもトレードマークだと思っているポニーテールがない。
「ない……」
「気付いてなかったのか？」
「うん……」
解（ほど）いた記憶がなかったから、ずっと縛ったままだと思ってた。
「恐らく、昨夜の戦いで私を庇（かば）ってくれた時だと思います。それまでは、ありましたから。あの後は、私もいっぱいいっぱいだったので、気にしている余裕がなくて……」

ツバキが申し訳なさそうに言った。
「ううん。仕方ないよ。お気に入りだったけど、特別なものって訳でもなかったから、ツバキは気にしないで」
「はい……」
気にしないでというのは、ツバキには難しいのかもしれない。真面目な子だから、間接的にでも自分に非があれば、責任を感じちゃうんだろうな……。
「そんじゃ、これから買いに行くか？　うちにはヘアゴムなんてないしな」
私とツバキが気まずい空気になると、ふいにアサトがそう言った。時間は午後三時前で、少し遅い昼食だった訳だけど、夜までは間がある。
「でも、自宅待機なんでしょ？」
「そりゃ、小学生ならそうだろうが、台風でもないのに中高生がおとなしく家にいると思うか？　俺は面倒だから出ないが、ほとんど遊びに出てるだろ」
当然のように言うアサト。でも、アサトの言う通りだとも思う。小学生でも、高学年の男子ならやりかねないだろうし。
「家にいるより、外出した方が気が紛れるだろ。せっかくそんな姿になってるんだし、今しか出来ない事とかやったらどうだ？」
「例えば？」
「その姿じゃないと似合わない服を着てみるとか。盗んだバイクで走りだしてみるとか」
「……どんな姿でも犯罪だよ」
アサトが言ってるのは、たしか古い歌の歌詞だったと思う。お父さんが昔に流行(はや)ったって歌ってた。
「いいんじゃないでしょうか。せっかくですから、橘さんに似合う服を選んでもらってきてください。その和服では、どうしても目立ってしまいますし」
「その言い方だと、ツバキは行かないみたいに聞こえるんだけど」
「お二人のデートを邪魔するほど野暮(やぼ)ではないつもりです」
ツバキの言葉に思考が停止する。
デート？
デート!?
そういえば、公園で会う時はいつも二人だけど、あれは『リハビリ』っていう名目だし、日曜日はツバキも一緒だったから、アサトと二人で『デート』ってした事ない。
「デートって……」
「あら。今のやみひめさんと並んで歩いて、デートに見られないと思いますか？」

アサトの否定的な言葉を、ツバキが更に否定した。確かに今の私はアサトと同年代の容姿だから、兄妹には見られないと思う。

「判った」

「判っていただけましたか。では、お二人でデートを――」

「絶対にツバキも同行してもらう」

「え？」

ツバキが珍しく、目を点にしてる。でも、アサトの考えてる事が判らないのは私も同じ。どういう事だろう。

「『妹』を同伴させれば、それはもうデートじゃないだろ？」

「あの……『妹』というのは私の事でしょうか？」

「前に『兄さん』って呼ばれたな」

「あれは……」

確かに日曜の買い物の時、私がアサトを『お兄ちゃん』って呼んで、ツバキも便乗して『兄さん』って呼んでた。これはアサトなりの、あの時の意趣返しだ。根に持つなぁ……。

「そんなにやみひめさんとデートが嫌なんですか？」

ツバキが不思議そうにアサトに訊(き)いた。

うん。私も知りたい。

「あ、いや……」

アサトが珍しく言葉を濁した。普段から雄弁な方じゃないけど、言いたい事は言うタイプだから、こういう反応は珍しい。

「橘さん？」

ツバキが可愛らしく小首を傾げる。今の私だと、アサトと同じでツバキを見下ろす事になるから判るけど、自然と上目遣いになって更に可愛い。ツバキは計算じゃなくて、天然でやってるからすごい。

「……普段なら気にならんが、今のやみ子が相手だと、妙に意識しそうだからだよ」

ツバキの上目遣いには抗えなかったのか、アサトが白状した。

「橘さん、意外と初心(うぶ)なんですね」

「普段は意識してくれないんだ……」

ツバキと私がそれぞれのリアクションをすると、アサトは隠す事なく面倒くさそうな顔をした。

「……だから言いたくなかったんだ」

そんなアサトを励ますように、いつの間にか足元に来ていたベアトリーチェが膝に跳び

移って鳴いた。

『ご主人様、ファイトだにゃん』――と言っています」

「ツバキ、ベアトリーチェに台詞（せりふ）を当てるのが楽しくなってるよね？」

「そんな事はありませんにゃ」

「あはは。もうツバキの語尾が猫っぽくなってるだけだ」

いつの間にか、ツバキとの気まずい空気がなくなっていた事に気付く。

だけど、私が元の姿に戻る方法は判らないし、〈カグツチ〉がどうなったのかも判らない。

くらうもそのままだし、問題は何も解決してない。

そして、解決する方法も判らないまま。

だったら、現実逃避かもしれないけど、今はあえて考えない方がいいのかもしれない。

気分が落ち込んでいる時に考えても、悪い方向にしか発展しないだろうから。

だから――

「三人で行こうよ。日曜日に買い物に行ったみたいに。あの時も楽しかったから」

「やみひめさん……」

「一緒だよ。戦いたくないけど、怖いけど、もう少しの間だけでも……ね？」

「……はい」

ツバキの表情は困ったみたいな笑顔だったけど、それでもいい。手伝えないけど一緒にいたいなんていうのは、私の勝手な都合で、わがままだから。ただ、ここでツバキとの関係を終わらせるのが怖くて、時間稼ぎをしたいだけだから。

でも、それでも――

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第十二話をお届け致します。

なんというか、懐かしいです。戦闘シーンが続いていたので、こうして日常シーンに戻ると、安心感が生まれます。そのせいか、気付けばここまでで二十ページを越えました。久々です。本編・第八話以来です。

さて、この手の話で主人公が挫折を経験するのはお約束ですが、このタイミングはかなり遅いです。なにせ感覚的にはもう終盤に入っているので。それだけ戦闘シーンをやらなかったという事ですが、後悔なんてあるわけない――いや、本当に。

この作品の目的はバトルを書く事ではないので。

良きところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

次回は1クールアニメであれば最終話となる第十三話ですが、ちょっと来月の十五日に掲載する自信がありません。来月開催される『ＺＡＯＤ』にエントリーしまして、その準備に忙殺される予定なので。

結果は神のボルシチです。

解説すると、神のみぞ知る→神の味噌汁→ボルシチってロシアの味噌汁みたいなもんでしょ？→神のボルシチ！

……解説が要るギャグほどつまらないものはないにゃ。

２０１５／１０／１１　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る